

オリエントの視点から

古代メソポタミアの神話と文学

月本 昭男

古代メソポタミアの神話と文学は言語的にはシュメール語とアッカド語に大別される。楔形文字を考案したシュメール人が経済活動をはじめとする社会の様々な記録とは区別される文学を粘土板に記しはじめたのは、シュルツパクやアブ・ツアラビーフ他の出土文書が示すように、前三千年紀中頃であった。そこには神話、讃歌、神名表、人生訓などがみられるが、概してそれらは短く、文学作品として論じるには未だ不明な点も多い。

文学作品として論じるシュメール語の文献はグデア円筒碑文（前三千年紀末）が最初であり、今日に知られるシュメール語文学作品のほとんどは、アッカド語文学が記されはじめる前二千年紀前半以降に記されたものである。つまり、アッカド語の神話や文学を残した書記たちが、同時に、もはや生活言語でなくなっていたシュメール語の作品を伝えたのである。それはアッカド語文学にもシュメール文学の伝統が流れ込んでいることを示す。じじつ、アッカド語の神話と文学には、『イシュタルの冥界下り』のようにシュメール語から翻訳された作品や、『ギルガメシュ叙事詩』のようにその伝承がシュメール語作品に遡る作品があり、シュメール・アッカド両語で伝えられる神話や宗教文書も少なくない。

ふつう文学は形式の上から散文と詩文に区分される。しかし、古代メソポタミアの文学作品は一般に1行1文で構成されるため、物語などの場合も詩形をとることが多く、散文と詩文の区分は必ずしも明確でない。他方、内容から文学を分類できるかといえば、その場合もつねに厳密な基準があるわけではない。とくに神話と伝説と叙事詩の区別は曖昧とならざるをえない。以下では、便宜上、神々を主な登場人物とする物語を神話、それ以外の作品を文学と呼ぶ。後者は叙事詩、詩歌、知恵文学、その他に分けて紹介する。但し、王碑文と祈祷は除く。王碑文のなかでもとくにアッシリアの王碑文は、その自然描写などに文学性に富む表現が用いられており、サルゴン2世の第八回遠征碑文がそうであるように、神への書簡という文学形式が採用されるので、歴史文学とみられなくもない。また、一定の様式をそなえる祈祷は詩歌とみなされる。しかし、文学と呼ぶには、これらは特定の目的指向性に支配され過ぎている。

メソポタミアの神話は主題により、世界や人類の起源神話、神々の抗争神話、冥界神話、洪水神話などに大別できる。ただし、複合的な神話もあり、起源神話が論争文学（後述）やト占文書の冒頭や呪術文書中に挿入される場合もある。

まず、世界の起源を物語る創成神話には天地分離、天地交合、天地創造の三つの型が認められよう。天地分離型を代表するシュメール語の作品『鶴嘴讃歌』によれば、エンリル神が大地から天を引き離した後、「天地の結び目」において「鶴嘴」が造られ、人間が自生した。天と地の交合により世界が生み出される天地交合型の多くは呪術文書に短く記されて残された。アッカド語の創成神話の主流はなんといっても創造型である。その代表作『エヌマ・エリシュ』は、マルドゥク神が女神ティアマトを撃破して、その屍体から天地を創造する物語を展開する。

人類の起源は自生型と創造型とに分れるが、前者は『鶴嘴讃歌』などシュメール語の作品に限定され、ここでも創造型が一般的である。神々は神々の労役を負わせるために人間を造ったといわれ、

『エヌマ・エリシュ』や『アトラ・ハシス』などでは、その際、殺された神の血を混ぜた粘土で人間が造り上げられる。こうした人間創造に携わる男神はエンキ（エア）、女神は必ずしも一定しない。

世界の秩序維持を主題とする抗争神話には、ニムルタ神が世界を混乱させた勢力を撃破して世界秩序を回復する物語（『アンズー神話』『ルガル・エ』）の他に、新世代による旧世代殺害型（『ドゥンヌの神統譜』他）、怪物退治型（『ラブ神話』他）などがある。それに対して、世界の混乱を描く『エラ神話』や神々が洪水を送って人類を滅ぼす洪水伝説などは一種の破壊神話といってもよい。

冥界神話にはメソポタミアの冥界観が色濃く反映する。冥界神ネルガルが冥界の女王エレシュキガルの夫となる『ネルガルとエレシュキガル』、冥界の女王となろうとして一旦は冥界に留められてしまう『イシュタルの冥界下り』などの物語がそれであり、死んだ英雄が冥界に赴く物語群（『ウルナムの死』『ドゥムジ（＝タンムズ）の死』他）は葬送儀礼を物語化した作品と考えられよう。人間を主人公とするが、神話性の強い物語として、永生獲得に失敗した『アダバ物語』、子宝の草を求めて天に飛翔する『エタナ物語』などがある。

古代オリエントでは、ギリシアと異なり、神話から叙事詩へという文学の発展はみられず、両者は併存関係にあった。シュメール語の叙事詩には、何ほどか神話化されたエンメルカルとルガルバンダを主人公とする作品群が知られる。イラン山岳地帯の都市アラッタとの間の交渉と交易をめぐる『エンメルカルとアラッタの主（エン）』、アラッタ遠征と帰還（その間の病気と回復）を物語る『ルガルバンダ叙事詩（Ⅰ、Ⅱ）』がそれである。ギルガメシュをめぐるシュメール語伝承は5点ほど知られている。そのなかで、キシユの王アッガとの抗争を主題とする『ギルガメシュとアッガ』は一種の歴史叙事詩である。『ギルガメシュの死』は上記の冥界神話に近く、『ギルガメシュとフワフ』と『ギルガメシュと天牛』は一種の英雄譚、『ギルガメシュ、エンキドウ、冥界』は人間の死後の運命をめぐる対話に焦点が置かれている。これらの叙事詩の主人公がいずれも「ウルクの王」であることは、古代都市ウルクにシュメール叙事詩の伝統が形成されていたことを思わせる。また、これらの作品には一方で人間の限界が、他方で神々の権能が様々に描き出されている。

アッカド語の作品では、シュメール伝承をふまえた『ギルガメシュ叙事詩』が古バビロニア時代からヘレニズム期まで1500年以上にわたり、地域的にも広範に伝えられていた。洪水伝説などの神話を採り入れたこの作品には、生と死、人間と神、友情などといった人生に関わる諸問題が折り込まれている。それに対し、『トゥクルティ・ニムルタ英雄叙事詩』をはじめとする英雄叙事詩はもっぱら王の事績を讃える歴史物語である。

次に詩歌に移ろう。シュメール語の詩歌は基本的に祭儀において歌い手が朗唱した祭儀詩である。それは大きく讃歌と哀歌に分類される。

讃歌の対象はなによりも神々である。しかし、神々とならんで神殿や都市が讃えられる作品も数多く作られ、王の讃歌はウル第3王朝時代およびイシン・ラルサ時代の聖婚儀礼を背景にする。それに対して、哀歌は都市の崩壊や衰退を嘆く作品であり、『ウル滅亡哀歌』に代表されるように、歴史的な事件を前提にするものが多い。神々に捧げた一連の哀歌調の祭儀歌も残されている。内容的には哀歌と呼べない作品もそこには含まれるが、これらは伴奏に用いられる楽器などによって、当時すでにバラグ（balag「ハープ」）、エルシェンマ（eršemma,ér「嘆き」,šem「太鼓」）、エルシャフンガ（eršahunga,ér「嘆き」,šà「心」,hun(g)「鎮め」）、シュイラ（šuiilla,šu「手」、il「上げる」）などと呼ばれていた。なかでも、元来、「聖婚」儀礼を背景とするイナンナとドゥムジに捧げられた祭儀歌はセレウコス朝時代まで伝えられたのである。

これらシュメール語の作品のなかには、アッカド語併記で伝えられたものも少なくないが、アッカ

ド語のみで伝えられた讃歌や哀歌は多くない。ひとつには、後々まで、宗教祭儀においてはシュメール語の祭儀歌が用いられたからであろう。アッカド語で記された神々讃歌は祈祷に、哀歌は災厄を訴える個人の嘆きとして治癒儀礼などに、それぞれ組み入れられていることが多い。王讃歌や神殿讃歌はアッカド語では残されなかった。

メソポタミアの知恵文学を厳密に定義することは難しい。ここでは博物誌に関わる文学作品と人生を語る作品にかぎって紹介しておこう。

前者の代表はいわゆる「論争文学」と呼ばれる作品である。『木と葦』『鶴嘴と犁』をはじめとするシュメール語の作品群、『牛と馬』『ポプラと月桂樹』などのアッカド語作品が知られる。そこでは対となる登場者が互いに自己を主張し合う。しかし、そのいずれがより優れているかということよりも、論争を通じて開示される自然や文化の調和にその主眼はおかれているように思われる。

自然に対して、社会や人生は矛盾に満ちている。格言はそうした矛盾を生き抜く知恵である。書記の練習帳に数多く残され、書簡や物語に引用されるメソポタミアの格言は、もう一方で、大小様々な格言集として編集されていった。これらの格言はシュメールにはじまり（『シュルツパクの教訓』）、アッカド語世界に引き継がれた短詩形文学とみうる。そこには、ときに咬みや皮肉などを交え、ときに動物界に託して、社会や人間の観察がそこに綴られる（「犬にとって、夢は喜び」）。だが、人生や社会の観察は最終的には人間の苦難や人生の不条理の問題にゆきつく。こうした主題は『われ知恵の主を讃えん』『バビロニアの神義論』『人と義人の苦難を主題とするその神』『悲観主義者の対話』など、多くは論争形式で繰られるアッカド語作品に取り上げられた。旧約聖書『ヨブ記』の先駆けがここにある。

アッシリアの王碑文が文学性に富むこと、一定の様式をふまえた祈祷が詩歌の一種とみうることなどはすでに述べた。この他にも、様々な形式の文学作品が古代メソポタミアの諸遺跡から発見されている。たとえば、書簡の形式をとる作品群（神への書簡〔含シュメール語〕、神からの書簡、『ギルガメシュの書簡』）は書簡文学と呼びうるだろう。自伝文学には、史実をふまえた自伝（『イドリミ自伝』『ナボニドゥス自伝』他）の他に、虚構性の強い伝説風の自伝（『サルゴン（1世）伝説』他）などがアッカド語で残る。『マルドゥク預言』『王朝預言』など、神託としての預言とは別に、しかし預言という形式をもって、過去の時代を事後的に記す一連の「預言文学」もまたアッカド語文学の一分野をなす。

このような古代メソポタミアの神話と文学は、楔形文字文化の終焉と共に地中に埋もれ、ながらく忘れ去られていた。それが再び知られるようになったのは、遺跡の発掘調査により次々と文書が発見され、それが解読されはじめた19世紀中頃以降のことである。本稿はそれらを概観するにすぎないが、それでもここに人類の古代精神史の一端を垣間見ることはできるだろう。じつにメソポタミアは神話と古代文学の宝庫であるといってよい。ここには比較神話学や比較文学の豊かな資料が存在する。加えて、発掘を待つ遺跡には未知の文書がなお数多く埋もれている。